



神と妖怪

川崎ゆきお

妖怪博士はある地方の妖怪祭りに呼ばれた。呼んだ側は妖怪の博士だと思ったわけではない。つまり、妖怪博士そのものが妖怪だと。

そんなはずは当然ない。妖怪博士という名前がほしかっただけかもしれない。

この地方というか、小さな村だが、妖怪がいる。隣の村にも、そのまた隣の村にも。だから、妖怪の多い地域なのだ。それがまだ残っているだけでも大したものだろう。

妖怪博士も、それに興味を持ったのは確かで、彼自身が見せ物のような呼ばれ方だったが、快く引き受けた。交通費と宿泊料が出るだけでも満足で、これはお金をもらって旅行ができるようなものなのだ。しかし、その村は特に観光地ではなく、妖怪による町興し、村興しの規模ではない。

「モッチンと呼んでいる村の妖怪がこれです」

地元の人が可愛いイラストを見せる。今風のゲーム系の絵だ。

「これは田の神とも言われていますが、うちではモッチンです」と説明する」

もう一人が、別のイラストを見せる。

「これはアシナガでして、モッチンと役目は似ていますが、足が長い」

「何をする妖怪ですか。そのアシナガとは」

「田にいる悪い虫を食ってくれたりします。鶴のように足が長いでしょ」

「モッチンは田に水を張るときの神様です」と、そのイラストを持った人も言う。

また一人、イラストを見せてくれた人がいる。この人の村にいる妖怪らしい」

「これは何ですか」妖怪博士が聞く。

「カッパです」

「しかし、カッパには見えませんが」

「ドロンパと、村で言ってます」

「泥河童のようなものですか」

「はい、こちらは田に水を引くとき、手伝ってくれます」

「見られましたか」

「見ません」

「では、それぞれ想像図なんですね」

それぞれの村の先祖が語り伝えたものらしい。

「これらは田植えの前から来て、稲刈りが終われば山に帰られます」

「はい」

「普段は山にいます。それを春先にお迎えします」

「それは、神ではないのですかな」

「昔はそうだったようですが、今では妖怪にされてしまいました」

「どうしてですか」

「領主が来て、その人が都の人で」

「ここは荘園だったのですかな。公家とかの」

「はいはい」

「それで」

「それで、神社ができました。お寺も」

「それまではなかったのですか」

「祭場のようなものがありました。そこで春先、あの神様たちを御山から呼ぶのです」

「神社との関係は」

「神社は神社で似たようなことをしています。だから、重なるので、村の神様は捨てられたのです」

「あ、はい。つまり、妖怪の発生ですなあ」

「そうです。山の神様、つまり村の神様はお餅が好きなんです。だから、うちではモッチンと呼んでいます。餅の中でも焼き餅が好きです。焼いた餅です。それを備えて、お呼びするのです」

他の村も似たようなことをしていたらしい。

「つまり、重なるので、追い出されたと」

「はい、それで妖怪になって、暴れるので、妖怪祭りをやっております。これは妖怪ブームになる前から、ご先祖様は毎年やっております」

「餅の他に何を備えますかな」

「五穀です」

「魚は」

「それは珍しくないのです、備えません」

「ここは海から遠いようですが」

「川魚なら、ありますが、神様は始終食べておられるので、備えなくても良いのです。逆にもらったりします」

「それらも言い伝えですか」

「はい」

「でも今は妖怪なのじゃな」

「元は村の神だったのです。だから、崇られないように、こっそりお祭りしています」

「神社とは別に」

「はい、妖怪たちは神社をいやがります。山の入り口でこっそりお祭りをします。そのイベントを、各村共同で、やるようになりました。今は遊びですが」

「はい、よく分かりました」

妖怪博士は村々の背後にある山々を眺めた。

妖怪の正体どころか、神の正体まで何となく見た思いがした。

了